

# ソポクレース『アンティゴネー』 翻訳

水\*  
崎  
博  
明

## 〔登場人物〕

アンティゴネー    テーバイの先の王オイディプースの娘

イスメーネー    アンティゴネーの妹

合唱隊（コロス）    テーバイの老人たち

クレオーン    オイディプースの妃で母のイオカステーの兄、今はテーバイの王

番人

ハイモーン    クレオーンの息子

ティレシアース 盲目の予言者

報せの男 甲、乙

エウリュディケー クレオーンの妃

〔場所〕

情景——「オイディプース王」においてと同じもの。すなわちテーバイの王宮（かつてはオイディプースのものであった）の前の開けた広場、背景は宮殿の前面を現しており、三つのドアがあり、その中央の最も大きなそれ（王の扉）は「内庭への門」と呼ばれるものであって、それらが家の内庭への主要な入り口としてある。

彼のオデュッセウスの遺児ポリュネイケースは、アルゴスの軍勢の支持を受けて祖国テーバイへと進軍していた。その力づくで祖国の主権を弟エテオクレースからもぎとろうとしてのことだった。だがしかし、このドラマの始まる前日は、進入したアルゴス勢には悲惨の極みであった。テーバイの七つの門の六箇所では、テーバイの戦士がその相向かい合ったアルゴスの敵を殺戮した。だが、七番目の門では、エテオクレースがポリュネイケースに相対し、各々、対する者の手で倒れたのだった。アルゴスの軍勢は夜の間に敗走した。クレオン、今やテーバイの新たな王は、ちょうど今しも布告を出し、宣言したのだった。——エテオクレースは国家からする諸々の名譽をもって葬らるべし。さ

れどポリュネイケースの屍は埋葬されずに棄ておかるべし、と。(R・C・ジェブの前書き)

〔プロロギス〕(199)

(アンティゴネー・イスメーネー登場)

アンティゴネー 血筋の同じ姉妹きょうだいの、ねえイスメーネー、あなたは御存知だわね、ゼウスがオイディプスから伝わるいろんな厄災のうち、どんなものを私たちこうしてなお生きている二人に、未だ果たさずにいるかということ。だって、何一つ苦しいことも破滅を免れたものも恥ずべきことも不名誉なことも、ありはしないのですもの、あなたと私の禍いなのだとこの私が見てはいないといったものなどは。今もまた何をそれとしてあらためて人々は言っているのかしら、このポリス中に御触れを御出しになられたそのことを、軍の司が今し方に。何か認識をあなたはお持ちでらして、それに聞き及んでいらっしゃる？ それともあなたはお気づきではないのかしらね、親しい方々へ向かって敵かたきどもにこそ適当な悪が及んで来ているのだというのを。

(100)

イスメーネー この私には、先ず、何の物語も、アンティゴネー、親しい方々のは、嬉しいのも辛いのも届いては参りませんわ。二人の兄弟たちから私ども二人が奪い取られたその日、一日のうちに二重の手でもって死んでお行きになったその日からは。して、アルゴス人の軍勢びとが今この夜に逃げ去って以来、何一つより以上のことは私は存じませんわ、私がより幸運で一層あるものなのかも、難儀してあるのかも。

アンティゴネー 立派に知ってたわ、それであなたを中庭の門の外へとこのために連れ出しのだわ。ただあなただけが聞くようにと。

イスメーネー ですが、何なのですか？ だって、あなたは明らかにしておいでですからね、何かの話しを暗く沈んでお考えになって。

(二〇)

アンティゴネー お墓のことでは私たち二人に、兄様方を、クレオーン様、お一人は名誉をより重んじなされたがもう一方はその名誉を打ち遣られておいてではないのかしら。エテオクレースの方は、噂では、定法とともに地面の下に葬りなされた、地下の死者たちの両眼にも名誉を戴ける者として。ですが、惨めに死んでお行きになったポリュネイケースの亡骸は町中の方々に伝令の口から布告されたそうだよ、埋葬はならぬ、誰も哀悼してはならぬ、嘆かれぬまま放置せよ、葬られざる者、腐肉を喰らう鳥どもにとつての甘い蓄え、向い見下ろす彼らには餌の恵(三〇)みにもと、このように。そうしたことを、人々は言ってますわ、あの善きクレオーン様があなたとこの私に、ええ、この私にだと私は言いますわ、御布告なされたのだとか。そしてまたこちらへもお出でなさるのだとか、それらのことを知ってはおらぬだろう者らに断固たるものとして御布告下し置かれようとおつもりで。そして事を導くにいい加減であってはならぬ、いや、誰でもあれそれらの何かを遣る者は、死がその前に置かれるのだ大衆によっての石撃ちの死がポリスの中で、といったことも。そのようにあるのだわ、あなたにはです、それらのことが。そしてあなたは、きっとこれから示すのだわ、あなたが素性よく生まれついておいでなのか、血筋よく生まれた者から出た卑しい

者なのかを。

イスメーネー　ですけど何を、御<sup>お</sup>勞<sup>いた</sup>しい御方、もしそれらのことがそれらの中にあるのなら、結び目を解いて行くにも固くするにも、この私が付け加えることが出来るのですの、これよりもっと。

(四〇)

アンティゴネー　一緒に骨折って下さりまた一緒に事に当たって下さるか、お考えになって。

イスメーネー　どのような何か危険なのをと仰有られるの。何処に、一体、あなたはいらっしゃるのかしら、お考えの。

アンティゴネー　お亡骸をこの手とともに、あなたは持ち上げて下さるおつもりなのかどうか。

イスメーネー　だと、そもそも埋<sup>う</sup>葬<sup>め</sup>する<sup>こと</sup>を、お考えなのだね、あの方を、ポリスにとっては禁じられたことなの。

アンティゴネー　ともかくもこの私の、それにあなたの、あなたが望まなくたって、兄<sup>い</sup>弟<sup>で</sup>を<sup>な</sup>のだわ。私は裏切ったところを捕えられたりなどきつとしないことでしょうからね。

イスメーネー　何と大胆不敵な御方、クレオン様が禁じてらっしゃるというのに。

アンティゴネー　いやしかし、何一つもあの方にはこの私の方から私を閉め出すような資格などはないのです。

イスメーネー　ああ御勞しいこと！　お考えになって、お姉さま。お父様はどのようにこの私どもにとって世の憎しみを買い恥に満ちてお亡くなりになられたかを、自らお暴きのいろんな罪から両の眼を御自身が御自身に(五〇)

向けた手でもって御打ち砕きになられた上で。その後は母で妻、二重の言葉の方が、縊よられた綱でもって命を痛めつけになりました。三番目には兄弟お二人が一日のうちに互いの手で殺しつつ、哀れなお二人、死を共通のものに為遂げておしまいでした。お互いの手でもって。この今は、だがあらためて、ただ私ども二人だけがこうして孤独に残されてありながら、あなたはお考えになられてね、どれほどもって最悪の仕方で私どもが死ぬことだろうか、もし私ども掟に背き独裁なさる方々の御触れや数々の権力を踏み躪にることがあるならば。いや、心中、思うべきだ（六〇）わ、先ずはこれ女として私ども生まれついているのだってことを、殿方に向かつて戦って行くようなものじゃないのだ、と。してそれから、私どもは一層力のある御方たちからして支配を受けているのだということを。そこでまたそれらのことでも聞くべきなのだわ、またそれらより一層辛いことどもでさえも。この私は先ず、そうであれば、地下においでの方々には共感を持って戴くことをお願いしながら、私はこれらのことを強いられているのだと考えて、権力の座にある方々には服従するつもりですわ。だって、出過ぎたことをすることは何の思慮あることでもありませんからね。

アンティゴネー 私も言いつけることを考えてもいませんけれどあなたがもしそのうち何時か遣る気になったとしても、とにかくまあこの私と一緒に気持ちよくあなたが行っているということもないことでしょうよ、いい（七〇）え、あなたはいらっしゃい、あなたによしと思われようそうした方で。ですが、あの御方は、私がきつと申います。立派なこと、私にとってはそのことをしながら死ぬことは。親しい者としてあの方と御一緒に私は身を横たえること

でしょうよ、この私の親しんでいる人と御一緒に。神意に適うことを見て無法の行為に及んで行きながら。一層多くの時間があるのですからね、その間、私が黄泉路の方々に気に入ってもらわなくてはならない時間はこの地上の方々にそうであるのに比べたならば。だって、彼<sup>かしこ</sup>処では私は永久<sup>とわ</sup>に身を横たえることでしょうかね。ですが、もしあなたがそれをよしと思われるなら、神々の中では名誉あることを、あなたは蔑<sup>ないがし</sup>ろにしていらっしやいな。

イスメーネー この私、蔑ろになど致してはおりませんわ。ですが、ポリスの方々の意に背いてまで振舞うように、私は、生来、何の頼りも持ち合わせてはいないので。

アンティゴネー あなたの方は先ず、そんなことなど持ち出してもいられるわ。ですが、この私はです、(八〇)お墓をお兄様、この上なく親しい御方のために土でもって積み上げにこれから参りましょう。

イスメーネー ああ、御劳しい。何とも私はあなたのことが心配です。

アンティゴネー この私のことなど気にしないで。あなたはあなたの身に降りかかってくることを正すんだわね。

イスメーネー いやしかし、でしたら、とにかくお知らせなさいますな、そのお仕事、誰一人にも。いいえ、そっと密かに隠しておいでなさいませ。御一緒に同じようにこの私もきつと隠しておきますわ。

アンティゴネー おお、いや。ありていに仰有るがいい。ずっと多くあなたは憎たらしくなるわ、黙っていれば。皆にこのことをあなたが触れまわさずにいたりなどしてだと。

イスメーネー 熱い心を、凍りつくような行為のもくろみに、あなたはお待ちでいらっしゃるのだわ。

アンティゴネー けれども私は分ってるわ、気に入ってもらってるのだと、取り分けて喜ばせることを私がしなければならぬその人たちにはです。

イスメーネー もしとにかくあなたがお出来でもいらっしゃるのならばですわ。いいえ、何の術もないこ（九〇）  
とをあなたは悲い求めてらっしゃるのよ。

アンティゴネー でしたら、私が力を持たないそんな場合には、きっとすぐ私はやめてしまっておりましょう。

イスメーネー ですが、土台、追い求めるってことが相応しくないのだわ、頼りのないことなどを。

アンティゴネー そんなことなどをお言いだとあなたは先ずは憎まれることでしょうよ、この私の側から。して死んだ方にとっては敵として、正当にもきつと留め置かれることですわ。いや、放っておきなさい私を、そしてこの私から出た酷い企みが恐ろしいその目に遭うままにすることだわ。だって、私は蒙りますまいから、それ程のことは何一つ、立派に死なないというその程のことを。

〔アンティゴネー左手より退場、イスメーネーも後を追って王宮の脇戸から退場しながら〕

イスメーネー いやしかし、もしそれでよしとあなたに思われるのであったら、お行きなさいな。ですが、このことは知っておいて。あなたはお考えなしにお行きだけれど、親しい者たちにはそのままずっと親しい御方なのだということを。



〔パロドス〕 (100-161)

(コロス、右手より登場、テーバイの長老たち)

太陽の輝きよ、最も麗しく諸々の以前のそれらの中にもあって

七つの門のテーバイに現れ出たる光りよ、

そなたは何時しかも現れた、

金色の昼の<sup>まがた</sup>瞼よ、ディルケーの流れの上を行って

白き楯持つアルゴスから寄せて参った重装備したる兵どもを、

まっしぐらの敗走兵とて、一層鋭いはみでもってそれは駆り立てた。

(110)

その兵は、我らが大地に、ポリュネイケースの

<sup>いさか</sup>争いをする争いから出発して

鋭く突き刺す声放つ

荒鷲とて 上から舞い降りて来た

真っ白な雪さながらの翼でもって身を包み

大勢の武装したる兵ら引き連れて

ソポクレース『アンティゴネー』 翻訳 (水崎)

八七三

〔第一ストロペー〕

(101)

兵らは馬毛で飾った兜を、また兜を被っていた

して館の上に留まるや、兵は血に汚れた槍の数々をもって

〔第一アンティストロペー〕

ぐるりと七つの門の入り口を、口をあぐり開けては呑み込まんと気負いつつも

立ち去った、我らが血にその顎でもって兵が満たされ、諸々の塔の冠を

（一二〇）

松明の火のヘーパイストスが掴み取るその前に、

そのようにもそれらの背中 of 辺りには広がった

軍神アレースの武具の打ち合う響きが、それはテーパーのドラコンの相撲の相手には、征服も難いもの

（10）

何故ならば、ゼウスは大きな舌の大言壮語を

甚だしくもお憎みなされ、者どもの

大いなる流れをなして向かって来るのに見入っては、

それは黄金の鋭い響きの数々の増上慢をもってしてだったが、

（一二〇）

投げつけなされたのだ、振り回された雷火でもって。

城壁の頂きで今や

勝利の雄叫びに逸っていた者に。

固い大地に激突して落ちた、振り落とされて、

松明を持つ男。物狂おしい突進とともに

バツコスの徒の振舞いしつつ、息を吹いていたのだ、

この上もなく憎らしい風どもの振動でもってして。

だがことの他にこれらのことどもは、一方、相いなったが、

他方、他のことどもを他の者どものその上に配分なされたことだった、手酷く打ち拉<sup>ひ</sup>ぎつつ偉大なるアレースの神が、最強のその御方が。

(二四〇)

何故ならば、七人の将、七つの門に配されて、

等しい数の者たちが等しい数の者らに向かって残したのだ、

戦況の向きを変えざるゼウスに対し、青銅づくめの貢ぎ物を。

痛ましいお二方を除いてのこと、その二人こそ一人の父と

一人の母から生まれ出て、彼ら自身の身に向けて

二つの征服する槍を構えては、持つことにもなって行つたのだ、  
共通の死の運命を二人ともが。

いやしかし、偉大なる名の勝利、ニーケー女神が来ましたれば、  
戦車の多いテーバイにお返しの喜びを喜びながらにも、

先ずこの今の諸々の戦争のその後では

忘却をこそ立つるべきぞ、

して神々の社すべてを、歌舞いの

夜びいてするのでもって、訪れようよ。だがテーバイの大地を揺り動かす  
パッコスの神が先導し給わんことを。

だがしかし、これは実に国の王様、

メノイケウスの御子、クレオーン様、新たな支配者、

神々からの新たなる運命の上に立って、

お出ました、一体、どんな諮りごとを巡らしなされておられてか、

〔第二アンティストロペー〕

(一五〇)

長老たちが特に呼び集められての

(一六〇)

この討論を親しくお立てになられたということは、  
共通のお触れをお送りなされて。

〔第一エペイソディオン〕(161-331)

(クレオーン、王宮の中央の扉より登場、従者二人を従えて)

クレオーン 皆の者、ポリスのことどもは確実に、神々は激しく逆巻くうねりでもって揺り立てられた上で、もう一度まっすぐに立て直し下された。してその方らを余は、使者どもを遣わし、市民らの中から二つのことで参られるよう呼び出した。一つには先ずラーイオス王の王座の權威を常に崇めておられたをよく承知しておったし、二つにまたあらためてオイディプースがポリスを正しく立て直しておられた時、またその亡くなられた後もあの方々のお子方のなお残ってあるのに対して常に変わらぬ心がけてもっていてくれたからである。されば、その方々が二(一七〇)重の死の定めに向かつて一日のうちに滅んだ時に、それは我と我が手でもってする汚れとともに互いを撃ち合い叩き合つてのことではあったが、この余が今や全権力と王座とを持つに至っている次第、失せし者たちとの血筋の近さによってだが。

だがしかし、手立てなどはないのじゃよ、すべての人の魂にかつまた心かけを知力を学ぶことは、諸々の統治にそ

してまた諸々の立法により彼が実地に試されるそれ以前にはな。何となら、この余にとっては全ポリスを正して行く身でありつつも諸々の最上の決心に触れることなく、否、或る恐れからして口を噤つぶんでしまう輩などは最（一八〇）悪だと思われるのじゃ、この今にも昔にも。またより大きいと誰であれ自らの祖国の代りに友をば見做す者は、これを何一つの価値なき者だと語るのだ。何となら、この余は、御照覧あれ、ゼウス、すべてを万事を常にみそなわす御方よ、また黙することは、災難が町中に安寧の代りに遣って来るのを打ち見ではよもやすまじきことであるし、友としていっかな国の敵をこの私に対して置くこともありはすまいからだ。認識しておればとて、この国が救われてありそしてそのまっすぐな国の上に立ち、航海して行きながら我々は友だちを作るのだと、こう。このような（一九〇）原則でもって余はこのポリスを栄えさせているのだ。

この今もまたこれら原則の兄弟たる布告を余は触れたところである、町の者どもにオイディプスから生まれた子供らについて。エテオクレースの方は、先ず、この国のために戦い、槍をもってありとある武勲を上げて果てたる御方、墓を築いて葬りかつまたあらゆることで清め参らすこと、最上の地下の屍たちにとって着き従おうあらゆることを。然るに、この御方に血を同じくする者は、あらためて、とはポリュネイケースのことを余は言うのじゃが、この者は父祖の大地と氏族の神々を亡命から立ち戻った身で欲した者だ、一方、火でもって徹頭徹尾焼き尽さ（二〇〇）んと。他方、欲した者だ、共通の血を啜り、して或る者どもは、奴隸にして引き立てんことを。この者こそが、このポリスに触れが出だし出されたところなのじゃ、彼を持つべき名誉とともに埋葬することも人が哀悼することも相な

らぬ、だが墓のない者として身体を鳥どもや犬どもから食らわれて、見るに拷問を受けているものとして、放っておくようにとじゃ。

そんなところがこの私の思案、また何時如何なるときにあっても、とにかくこの余からしては名誉をもって抜きん出たことではないであろう、悪人どもが正しい者たちよりとなど。否、このポリスにとって心馳せよくある者は誰にもせよ、死しても生きてあるときも同じようにこの私からして名誉を必ず受けることだろう。

コロスの長 あなた様にはそれらのことがその意に適うのですな、メノイケウスの御子息、クレオーン様、このポリスにとって悪意を抱く者と好意を持つ者に関しては。だが、掟はすべてともかく何処かしら、これを用いることが許されてあなたにはおありであって、それはまた死んだ者たちについても然り、私も生きている限りの者についてだってもそういうことで。

(一一〇)

クレオーン 見張り手として、そなたらが今言われたことどもにはあってくれるよう、心してもらいたく思っているぞ。

コロスの長 誰かもっと若い者にそのことを運ぶ仕事はお課しなされませ。

クレオーン いや、ちゃんと用意はされているのだ、とまれ屍の見張り手なら。

コロスの長 どんな別のことを、ではそこで、それとしてなおその上お命じで。

クレオーン 譲歩せざることをだ、これらのことに不信の輩には。

クロスの長 おりますまいぞ、それほどにも愚か者で死ぬことに恋焦がれるって者などは。

(二二〇)

クレオン そして実際、とにかく報いはそれなのだ。しかしながら、いろいろの望みの下、人々を利得はしばしばも減ぼしたのだ。

〔見張りの番人、左手より登場〕

番人 殿様、申し上げますが、それがし、急いで息を切らし参ったわけではございません、足も軽々せさせとせとせとなど。だってもそれがし、気がかりから幾たびも立ち止まったわけでして、道々この身を翻し、戻っちまおうかともしたことでして。心が言いますものだから、沢山のことを私に筋書きしながらに。哀れな奴は、何で行くのだ、そこへ行けばきつと罰を受けるところへなぞ。何て奴だ、また愚図ってるのかね。そうしたことをクレオン様が他の者からお知りになられたなら、どのようにして貴様は痛い目に遭わずに済むというのかね。そんなこん(二三〇)なをぐるぐる思い巡らしながらにそれがし、あ、気が進まずにゆっくりと遣って参りましたもので、そんな風で短い道程が長くなっておりまして。とは申せ、とまれ最後はこちらへと参りますことが勝ちを収めました次第、あなた様の許にですな。そしてもしそれがし何のこともはっきりとは申しは致すまいけれど、でも申し上げ致しましょう。望みを掴んでこそ参っておりますものでな、この身が蒙るは運命で決まったもの以外じゃあるまいと、こう。

クレオン だが、何なのじゃ、そのためにそちがその意気消沈の有り体であるってのは。



番人 申し上げとうございます、あなた様には第一に私自身に絡むこと。とにかく事はそれがしの遣ったのでもなく、またそれがしは見も致してはおりませなんだ、誰とてその遣った者があるのかを。それにまた正当に（二四〇）それがしが何かの悪の中へと落ち込むことなど考えられませぬ。

クレオン とまれこいつは、よくぞそちは狙いをつけ、して垣根をぐるりと事件に張り巡らしておることよ。だが、そちは明らかじゃ、何か異変を知らせようとておることは。

番人 だって、いろんな危険があなた様に対して多くの躊躇いを押しつけて来ますもので。

クレオン それでそちは言うまいとでもしておるのか、そんなら解放されて行っちゃまえ。

番人 そりゃあもう申し上げますとも、あなた様には。屍に何者かが先程お弔いの儀式を遣って、栄誉を与えて行つてしまつとりまして、それも肌の上に乾いた砂を振りかけ、なすべき清めも清めた上でして。

クレオン 何とそちは言うのだ。男、ども、の中、の何奴が、敢えてそうした所業に及んだのか。

番人 それが分からないんで。だってそこには何か鶴嘴の一撃もなし鍬での搔き上げもなし。して地面（二五〇）は固く乾いていて裂け目もなければ車の轍もなく、いいんや、犯人は何のしるしも残さぬ何者かであつたわけでして。けれども、最初の昼間の見張りがそれがしどもに示しますと、全員に驚きの厄介なのがその身に備わりましたんで。だって、その人ったら、一方、見えなくなっておりまして、墓に入れられたんではありませなんだが、罪の意識を逃れようとする者のとでもいうように薄く砂がその上にはございました。他方、跡形などは、野獣どものも犬どものも、

それが遣つて来たとも引き裂いたとも、何ら現れ出てはおりませなんだ。

互いの中で悪口三昧の騒ぎとなりました、見張りは見張りを言い返して行き、しまいには殴り合いが（二六〇）生じもしましたろう、それに止め手もまたおりませなんだ。どういつもこいつも犯人で、それでいて誰一人そうとははつきりせず、いいや俺は知らぬと逃げを打ちしましてな。してそれがしどもは皆、すぐにも鉄塊の焼けたのだって両手で掴み、火の中だつても歩き通すぞ、遣つてもおらんし犯行を企んだ奴と事に及んだことも身に覚えのないことを神々にかけて誓うぞとこう逸つたのでして。したが、お仕舞いに、あれこれの調べに何の増すところもなかった時、或る一人の男が申しますが、そいつは一人残ら全員が地面へ頭を下げるよう、恐怖でもって駆り立てたのでし（二七〇）たわ。だつても、それがしども言い返すことも叶わぬし、また遣つてみれば事が都合よく運ぶつてことでもありません。なんだからには。

してその筋書きつてのは、あなた様に事件のこれは持ち上げねばならん、して隠し立てはならんこうでして。でまたそうしたことが通りまして、このそれがし不運な奴を、籤が、結構な代物を掴むよう判決を下しましたんで。して参つた次第、いやいやながらの者が気が進んでない方々の傍に、とは、先刻承知のこと。だって、好みませんから誰一人、悪い知らせ使いなど。

コロスの長 お殿様、この私めには何か神よりして引き起こされた仕業としてこいつはありはしないかと、思いは先程より忠告しているのでございますが。

クレオン 黙るのじゃ、怒りでこの余をばしゃべくりおって一杯にしたりもする前に。愚かにしてま（二八〇）  
と同時に年寄りだと見出されたりせぬようにな。そちが我慢のならぬことを申すからじゃ、神霊におわす方々が先見をこの屍についてお持ちなのなどとぬかしやがって、神霊方がこの他に恩恵者のごとお尊びあってそれで彼奴を土でお隠し遊ばそうとなさったといふのか。彼奴めは柱廻らす諸々の社を火で燃やし、奉納の品々や神霊方の土地に諸々の掟をちりぢりにせんとて遣って来たのだ。それとも悪人どもを神々が尊ばれるところを、そちは目撃してでもいるのか。そんなことはあるはずもない。だがしかし、そうしたことをまた先刻よりポリスの男どもはやっ（二九〇）とこさ我慢していて密かに首を振り、頸木の下に首の背を正しく保とうとはしておらんのだ。この余に満足しようとして。この連中からしてだ、余は見事完璧に知っておるのだ、番人どもは報酬でもって逸らされてしまいそれらのことをしでかしたのだとは。何一つ人間たちにとっては金銭のように悪しきしたりたるものは芽吹きはしなかった。このものは諸々のポリスをもまた破壊し、このものが男たちを諸々の家から追い立て、このものがすっかり教え込み変えるのじゃ、優れた精神を恥ずべき所業へと取りかかるとな、死すべき人間たちのじゃよ。して（三〇〇）示したのじゃ、何でもやるぞのあり方を持つことを人間たちに、またすべての仕事に渡り不敬を知ること。

だがしかし、金で雇われて仕事をしこれらのことをなしたる限りの者どもは、何時か或る時には引き起こしたのである、罰を受けるそのことを。いやしかし、いやしくもゼウスがなおこの私からの敬いを持つのだとすれば、よく承るがよい、誓ってそちには言うが、埋葬の儀を執り行った当人を見つけ出し、そちどもがこの余が両の眼へと示さぬ

ようなことでもあれば、そちどもにはただ黄泉の国だけがお気に入りとは参らぬぞ、そちどもが生きながらに吊るされてこの傲慢を明らかにするだろう以前にはな。とは、利得は何処からもたらすべきか知ったその上で今（三一〇）後はそちどもが掴み取るように、また学ぶようにとじゃ、あらゆることから利得を上げたがってはならんのだということな。醜い利得などからは、より多くの者たちが災難に遭つとるのだとそちは見ることじゃろうからな、救われであるを見るよりはじゃ。

番人 何か申し上げてよろしかろうか。それとも私は向き変えて行くと致しますかな。

クレオーン そちは分らんのか、今もまたそちがどんなに耐え難くしゃべっておるかが

番人 両耳がでござりましょうか、それともお心をあなた様は噛まれておられますかな。

クレオーン だが、何でそちは決めるのじゃ、余が苦痛の何処かなどと。

番人 遣った者はあなたの胸を痛ませましょうが、両耳をこのそれがしは痛ませておりまして。

クレオーン おおこれは何てこった。何というしゃべりにそちが生まれついておるかは明らかじゃ。（三二〇）

番人 されば、とにかくにも、その仕業に何時か及んだ者などではなくってのこと。

クレオーン それらのことも、とにかく金で魂を見捨てた上で、お前は遣ったのだ。

番人 まあ悲しいこと、実に恐るべきことですね、とにかくその者にとってそうだと思われる者に嘘っぱちが思われるということは。

クレオン よろしい、めかし込んでいろ、その思惑を。じゃが、それらのことをしでかした奴らめをそちどもが余に示さぬようじゃったら、そちどもはきっと声も高く言うことじゃろう、卑怯な利得が悲惨を作り出したのだということを。

(クレオン、宮殿内へ退場)

番人 「捨てぜりふ」 いやしかし、先ずは、取り分け下手人が見つかったらなあ。じゃがそいつが見つかるか否かは、これはとにかく偶然が決めるのさ。あなた様がここにそれがしが参ったところを御覧になろうなんてことは、これはもうありは致しますまい。だってが、この今だって、このそれがしの判断のその望みの他に救われ(三三〇)て、それがしは神様方に多くの感謝を負っとるわけじゃがね。

(左手へ大急ぎで退場)

〔第一スタシモン〕(332-383)

あまたたり、恐ろしきことども。さはあれ何一つとて人間よりもより恐ろしきもの出で来たらず。〔第一ストロペー〕  
このものは。灰色の海の向こうへと、荒れ狂う南風とともに

進み行くのだ。口開けて一呑みせんとの勢いの、

うねり立つ四方の高波その下を、過ぎりつつ。

また神々のうちにいやが上にも高きもの大地をば、

朽ちることなく疲れを知らぬものとして、それは悩ませる、  
行く鋤に返す鋤なる年々を、

(三四〇)

馬の輩を使つては、土鋤き返し耕して。

思いの軽き鳥どもの、族を網打ち引いて行く、

〔第一 アンティストロペー〕

また荒野なる獣らのあのものこの類、して海の潮の生まれのも、  
編み上げた網の一巻きもってして、

巧みよき男こそが。

また彼は、抑えて勝る、諸々の仕掛けを用い、野が庭の  
獣、山を彷徨うものよりも。また強き鬣首こわ たてがみに生やしたる

(三五〇)

馬をば彼は馴らすのだ、首の周りにぐるり頸木を取りつけて  
また山に棲む疲るることなき牡牛をも。

言葉をも、また風速の

〔第二 ストロペー〕

思いをも、町を旋るそれぞれの心向しをも、彼は自らに教えたのだ

そしてまた大気が下、宿るに厳しい霜また霜の痛く刺す矢を、

また耐え難き雨の嵐の矢の弾を、避くることをも。

すべての途をつける者、策なくんば如何なるものへとも進みは行かぬ、

今まさに来んとの際にあるものの。ただハーデースからの逃れそれだけは、

助けを求め手にするは、遂に叶わぬことであろう。

だが諸々の癒す術なきその程の病いだとても、逃れん手立ては工夫した。

智慧として何かのものとて、技術の巧妙を

〔第二アンティストロペー〕

望み以上に持ちながら、或る時は悪、或る時は優れたものへと歩み行く、

国土のは諸々の掟をば、また神々のはその名にかけて誓った正義をば敬う時にその人は、

高く聳ゆるポリスの人、<sup>アポリス</sup>国無きは彼、その者によからぬことの

（三七〇）

ともにある者、向こう見ずとて、どうか決して私に食卓の伴どちとは

なりませぬよう、またどうか等しきものを決して思っなどいませぬよう、

かようなことどもをしでかそうとその者が。

「番人、観客の左手に登場、アンティゴネーを引き立てて」

コロスの長 何たる奇々怪々きざの兆しの中へと私は見入って心が惑うのか、この兆しをだ。どうして知っていて私は言い逆らえることだろう、この娘御がアンティゴネー様じゃあないのだなどと。おお、哀れな御方、そし（三八〇）て哀れな父オイディプスの娘御が、一体、何なのだ。何処かしら、あなたがとにかく王様のお触れにまた無考えから背かれたのを捕まえて、彼らが連れて来ているのではないのだろうね。

〔第一エピソードION〕（384-581）

番人 これがすな、そのう、さっきの仕業を仕出おなした女でして。これが埋めるところをそれがしどもが捕まえたんでさあ。いやしかし、クレオン様は何処にござろうか。

コロス 御殿から戻って、ちょうど折よくもお出しました。

クレオン 何事じゃ、これは。どのような巡り合わせでもって、余は折よくも参ったのじゃ。

番人 殿様、人間どもには何一つ「誓って否」などと宣言されることなどございせんなあ。だっても、後での思いが、先立つ認識だったのを嘘っぱちにしちまいますからなあ。殆どもう何時かこちらへ来ることなどあ（三九〇）るまいと断言せんばかりでこのそれがしはおりましたからは。あなた様の脅しでもってすな。それでもって、それがしあの時には嵐に遭うた目でござりました。とは申せ、望外の予期せぬ喜びは他の気持ちのよさには、まるでそ



の嵩、似るものでなく、遣って参りましてござります。諸々の誓いを通してはよしまたそれを破ってはおりましようとも、この娘御を引き立てて。この娘御、現場を取り押さえられたんでございます。弔いを整えておりますそのところ。

籤が今度は振られなど致してはおりませぬ。いや、このそれがしのめっけものであって、他の奴のじゃござりませぬ、このものは、さあ今、お殿様、この娘御を手づから、あなた様のそう欲しておられた如く、受け取って、お裁きも吟味もなさりませ。じゃが、このそれがしは自由の身、当然、これらの禍ごとからは放免されてありま（四〇〇）すことが

クレオン　じゃが、そちはこの女、連れて参ったは、どのようにして、何処から捕えてのことじゃ。

番人　この女がその男を弔い致しておりました。それですべてでござります。

クレオン　そもそもまた、そちは理解もし、そのまますすぐ語っておるのじゃな、そちの言うこともを。

番人　とにかくこの女の弔い致しておるところを目にすることです。あなた様の禁じなされた骸をばです。これで明らかではっきりしたことを、それがし語っておりますかな。

クレオン　でまた、どのように女は見られまた現場を押さえられて捕まえられたのじゃ。

番人　このようで事はござりました。それがしどもは見張りの場所に参って——それはあなた様から恐ろしいそれらのことどもを脅しつけられてしまつてでしたれど——すべての砂の骸を覆つたのを払い落としました湿つ（四一〇）

た身体を十分に裸にした上で、座っておりもうした、岩山のてっぺんに風に背を向けて。彼の男から来る臭いをそれが鼻を打たぬように避けましてな。それで、寝もやらずに一人が一人を口汚い言葉でもって掻き立てておりました、もしかして誰かがこの苦役のことを等閑なむざりにしようものならと。そうしたことは時間のそれ程に渡ってあったのでしたが、中天に輝く太陽の眉輪が止まり、灼熱が燃え盛りましてございます。するとその時突如として大地から土埃つちぼりが旋風つむじかぜが巻き上げ、そいつは天の難儀でござったが、平野を一杯に満たしたのでござります、平地の森のすべての葉っぱを損なうて。して、大いなる大気はそれらで全く一杯に満たされましてございます。じゃが眼をばつぶ(四二〇)でそれがしども、神の災いを堪こらえておりました。そしてこれがかなり経って立ち去った時、この娘御が見え申したのでござります。怒った鳥の鋭い声を張り上げて嘆いておりまして。それはちょうど雛鳥たちの空になった巢の、孤児の寢床を見た時のようでした。ですが、そのようにまたその方も、裸のままの軀を見るや、悲しみの声を張り上げて、して禍々まがまがしい数々の呪いを祈願致しました、その仕事を遣った者どもにですな。そして両手でもってすぐ様に乾いた砂を運んで来、よく叩き上げて作られた青銅の水差しから、高く掲げて三度の注ぎの注ぎでもって軀に冠をかけたのでござります。  
(四三〇)

そこでそれがしども見るや急ぎかけつけ彼女を皆して捕まえましたものの、何一つうろたえもしませんだ。それで先の所業に今度の所業、それがしどもは問た質たしも致しました。したが、何一つ娘御は否定せずそのままでございます。そいつはしかし、このそれがしには、同時に喜ばしくまた同時に心の痛むことでして。だって、自分が

災難から免れることとなったのは喜ばしい限り。じゃが、禍ごとへとお親しい方々を引き入れ申すは心の痛むことですからな。いやしかし、すべてそうしたことは受け取るにつけ、このそれがしにはより小さなこと、この身の安泰にくらべて見りゃあね。

(四四〇)

クレオン　そなたじゃ、そなた地面へと頭を垂れているそなたを余は呼んでおるのだ。肯<sup>うべな</sup>うのか、それともそいつは遣<sup>はな</sup>つてはいないと否定するか。

アンティゴネー　肯いますとも、遣<sup>はな</sup>つたことを。遣<sup>はな</sup>つてないなどと否定は致しませんわ。

クレオン　(番人に) そちは行くがよい、何処へなりと。重罪を逃れて自由の身じゃ。(番人退場、エンティゴネーに) じゃが、そなたは余に申してみよ、長々とではなく手短に。そちは知<sup>し</sup>つてお<sup>し</sup>てか、布告されたことを、そうしたことを遣<sup>はな</sup>つてはならぬのだとの布告をじゃ。

アンティゴネー　知<sup>し</sup>っていましたとも。何故に知<sup>し</sup>つてはいなかったなんてことがありましよう。おおっぴらになつてたことなのに。

クレオン　それだと、そなたはまさしく敢えてそれらの掟を踏みにじつたのじゃな。

アンティゴネー　だって何かしら私にはゼウス様がそうしたことをお触れなさった方であつたわけでは(四五〇)なく、黄泉路の神々とともにお住まいの正義の女神ディケーがそうしたものを人々の中に掟として定められのでもありません。それにまたそれほどの力があるとは思いませんでしたわ、あなたの御布告が。書かれてはいずにいて揺る

ぎのない神々の掟を、死すべき者でありながら抑えてそれに立ち勝ることが出来るほどには。

何故って、とにかく何かこの今にとか昨日にとかではなく、いいえ、永久とわにいつもそれらは生きているのでありそして誰一人知らないのですからね、何処からそれらが現れたのかとは。それら永久の掟に対する償いを、この私、どんな者の意向を恐れたからと言って、神々の中でまさしくしようとしていたなんてどうしてあったことでしょう。死ぬなんぞとは百も承知。どうして知らずにいましめようか。よしまたあなたが布告をお出しになられなかつ（四六〇）たにせよ。して寿命の前に私が死ぬだろうというのでしたら、それも更に儲けものだとは私は言いますわ。だって数々の災厄の中で、ちょうど私みたいに生きている者は誰であっても、どうして死んで儲けをもたらすことをしないでしょか。

このように、とにかくこの私にはこの死の定めにあたることなどは無にも等しいそれだけの苦痛だわ。いいえ、我が母からして同じく生まれた方が死んだのをお身体が葬られぬままにあるのを我慢したのであれば、それらのことは、私は苦しんだことでしょう。ですが、これらのことで私、苦しみなどするのですか。だが、あなたにとってもしも私がこの今に馬鹿げたことを遣っていると思われるなら、殆ど何か馬鹿げたお方に馬鹿さ加減を私は（四七〇）負っているのですわ。

クロス こいつははっきりしておりますな、生み落とされたのも荒々しく、荒々しい父親からしてあるのだと、娘御のもつその生まれ。して譲ることを御存知ではない、数々の災厄に。

クレオン いやしかし、知っておくのだな、あまりにも頑なな気性は取り分けて倒れるもののを。また最高に強い鉄の火から鍛えあげられて作られた大層に固いのは、粉々になりまた引き裂かれるのをそなたは見入りましょう。僅かな轡でもって御し難い馬どもが躡けられるのを余は承知しておるのじゃ。何故とて許されてなどはおらぬからじゃ、不遜の思いを持つことは、誰であれ身近な者たちの奴隷たる者がじゃな。じゃが、この女は傲慢に及ぶ仕（四八〇）方をよく知っておったのだ、諸々の掟として前に出されてあつたのを踏み超えて行きつつもな。して、傲慢は、遣つてしまつてであれば、これは第二のそれなのじゃ、それらのことに有頂天になり遣つた傲慢を笑つてのけるとはじゃ。そもそも現実、この余なぞは、一方、男ではなく、この女こそが、他方、男なのじゃ、もしそれらとして咎めなくて彼女に力量が置かれてあろうものならな。いやしかし、よしまた姉の子としてではあれ我らにとって家の守護神ゼウスのすべてより血が同じ者としてではあれ、自らもまたその血を同じくする者も、きつと逃れはするまいぞ、最悪の運命からしては。何故とて、全くその女もまた余は非難するからじゃ、この弔いのことでは等しい（四九〇）分企みおつたこと故に。そいつもまた、そなたら呼ぶように。中で余は見たからじゃ、今し方に彼女が狂い立ており更にまたとても正気でさえなかったところをだな。だが、心とは予めに捕えられてしまいがちなもの、犯罪者としてじゃ、何らまっすぐにではなくて陰に隠れて企む者どものはな。然は然りながら、とにかく余は憎むのじゃ、諸々の悪事の中で人が捕えられたるその上で、その後でそれをうまく体裁を繕うことを欲する場合にはな。

アンティゴネー 何かもつと大きなことをしようと思望でおられますの、私を捕えて殺すより以上の。

クレオーン 余は先ず何も。それを手にすれば一切を手にするのだ。

アンティゴネー そんなら何故躊躇うのです。この私にとってあなたの語ることどもの何一つも心地よ（五〇〇）  
くなどないように、それにまた何時か心地よくなどありもしないでしょうが、ですが、そのように、あなたにとって  
もまた私のことはもともと不愉快なのですわ。

とは申せ。何処からとにかく誉れを一層名高いものとして私は勝ち得たことかしら、本当の兄弟をお墓の中にお置き  
ましてよりは。この方々のすべてにこのことは喜びだと、きっと語られることでしょうよ、もしその舌を恐怖が嚙  
ませるようなことがないならば。いやしかし、独裁は随分と他のことでも幸福を享受しますけれど、またそれにはま  
あ許されてありますこと、その望むことを遣るのも言うのもね。

クレオーン ただ一人そなただけじゃ、カドモスの民の中でそのことを見ている手合いは。

アンティゴネー 視てられますわ、この方々だって。ですが。あなたに対して口を嚙んでおいでなのです。

クレオーン だが、そなたは恥じてはいないのか、この者どもより一人離れてもし考えているのだとしても。（五一〇）

アンティゴネー だって何の恥ずべきことでもありませんものね、同じ同胞はらからを敬い申すことは。

クレオーン されば同じ血を持つ者なのではないのか、敵対して死んだ者も。同じ血の方ですわ、一人の母、同じ  
父親から生まれた。

クレオーン それでは、一体、どうしてその者にとって不敬なことを好意として尊ぶのじゃ。

アンティゴネー そうしたことは証言などなされますまい、死んだ軀の御方は。

クレオーン もし彼をそなたが尊ぶとするならばということだ、それはそなたにはな、不敬な手合いに等しいものからしてじゃ。

アンティゴネー だって何か奴隷だってわけではなく、いいえ、兄弟としてお亡くなりになったのです。

クレオーン じゃが、この国を滅ぼそうとしてこそだぞ。して片方はそのために立ち上がっただ。

アンティゴネー それでも黄泉の国ハーデースは掟のそうしたこともを求めているのです。

クレオーン いやしかし、優れた者が悪しき者と等しい掟を得るべくもなからう。

(五二〇)

アンティゴネー 誰が知っておりましょう。地下から見れば法に適ったことではあるかどうかということ。

クレオーン 敵はかたきいっかな、よし死んだとても。友ではあるまいぞ。

アンティゴネー 私はともに憎み合うためにはなく、いいえ、ともに愛し合うためにこそ、生まれたのですわ。

クレオーン さあ、地下へと下りて行って、もし愛さなくてはならないのなら、あの者どもを愛するがよい。じゃが、この余が生きてある限りは女がおなこ支配することはあるまいぞ。

(イスメーネー、館の中から二人の従者に引き立てられて登場)

コロス そしてまあ、門の前にこのイスメーネー様、姉思いの方がはらと涙を零こぼしておいで。悲しみの雲が

両の眉の上、紅潮したお顔に陰を落としております。見るからにお美しい頬をお濡らしなされて。(五三〇)

クレオン　じゃがそなたは家の中で蛭みたいに潜んでながら余には密かに血を嘔すっておった奴じゃが、余は学ばずにおったものだ、二つの破滅を王座に対する反逆を養っておったのを。さあ、余に申せ、そちらもまたこの埋葬に荷担したと言うか、それとも与り知らぬと誓って言うか。

イスメーネー　遣りましたわ。その仕事。もしもこの方が御承知下さるのなら、私、その責めに荷担してまずし責めをお受けも致します。

アンティゴネー　いいえ、許すものですか、とにかくそのことを正義があなたに対しては。あなたは欲しませんでしたのだし、この私も共同させなかったのですから。

イスメーネー　いいえ、それらの災厄のあなたの中で私自身を受難の仲間にしても恥じはしませんわ。(五四〇)

アンティゴネー　誰のだってその仕事があるかはハーデースと地下の方々が証人でらっしゃるわ。口先でもって親しみを言う人を、この私、親しい人だと愛するものですか。

イスメーネー　ねえ、どうかお姉様、私を見下して、あなたと御一緒に死ぬことも死んだ御方を清めることもせぬようにとなど、なさらないで下さいまし。

アンティゴネー　死なせるのですかあなたを、私と共同してなど。それに、あなたが触れもしなかったことをあなた御自身のものなどにはなさらないで。私はいいの、この私が死んで行きさえすれば。



イスメーネー　でまたどんな暮らしが私にとって、あなたから置き去りにされてしまつては、好ましいかしら。

アンティゴネー　クレオン様に尋ねるのね。だって、この方のあなたは保護者でらっしゃるのだから。

イスメーネー　何故、そうしたことでも私をお苦しめになるの、何一つ足しにもならないのに。  
(五五〇)

アンティゴネー　そうよ、本当、苦しんでいればこそだわ、もし私がとにかく笑っているのなら、あなたの中で笑っているのです。

イスメーネー　何かでああ、しかしこの今にあなたのまだお役に立てるのかしら。

アンティゴネー　御自身をお救い。羨みはしないわ、あなたが咎から逃れたつても。

イスメーネー　まあ、悲しいこと、あなたの定めから私は無関係ってことなの？

アンティゴネー　だって、あなたはお選びだったわ、生きることを、ですがこの私は死ぬことを選んでのなもの。

イスメーネー　けれども、この私の議論が語られないままでってわけではなかったわ。

アンティゴネー　立派にと、あなたの方は一方の方々に、他方の方々にはこの私が思われていたことでしたわ、慮っていることだと。

イスメーネー　それにしても等しいのだわ、私たち二人の罪は。

アンティゴネー　しっかりおし。あなたの方は生きていますが、この私の魂の方はもうとくに死んでしまっているのですよ。死んだ方々のお役に立とうと。

(五六〇)

クレオーン 子供らのこれを余は言うぞ、一人は今し方に痴れ者となって現れたが、もう一方は生まれながらに痴れ者じゃとな。

イスメーネー だって、お殿様、いっかな芽吹いたものではあれ知性は止まりはしませんわ、不幸に出会って行く人たちには。いいえ、それは見捨て行くものなのですわ。

クレオーン それはそなたにとってのことじゃよ、ともかくも。そなたが悪人どもと悪事を遣ることを選び取ったその時にじゃ。

イスメーネー だって、何がたった一人の私にとって、この方と分かれて、生きられることなのです。

クレオーン いいや、「この方」なんぞといつてはならぬ。何故とて、最早おらぬのじゃから。

イスメーネー いいえしかし、あなた様は殺そうとおつもりで、御自身のお子様の許婚であるものを。

クレオーン 何故じゃとて、それは子をなすに適したは他人の女子たちでも然りじゃてな。

イスメーネー あの高イモーン様とこの方とにしっかりとしたものがあったそのようには行きますまいに。

クレオーン 悪い女どもをこの余は、息子らのためには、忌み嫌うのでな。  
(五七〇)

アンティゴネー ああ、最愛の高イモーン様、何とあなたを酷く扱われることでしょう、お父様は。

クレオーン とにかく余りにも面倒なのだ、そなたも、そなたの結婚も。

コロス これは本当にあなた様は、この方からあなた様のお子様を奪い取るおつもりで？

クレオーン 黄泉路の神ハーデースがこの者どもから結婚を止めさせとなされてるのじゃよ、この余のためにな。  
コロス 決定がなされた、どうやら、この御方が死罪だと。

クレオーン とまれ、そなたにとっても余にとってもな。愚図愚図せずにこいつらを中へ連れて行け、奴隷ども。  
してこれからはこの者らは女であらねばならぬし、放しっぱなしであってもならぬ。何故じゃとて、逃げ（五八〇）  
出すものだからじゃ、大胆の男どもさえも、近くに今や人生の黄泉路に見入る時にはな。

（一同、王宮の中へ退場）

〔第一スタシモン〕（582-630）

仕合わせ者よ、その人たちには諸々の悪を味わうことなく人生があるは

〔第一ストロベ〕

それと言うのも、神の御意志で家館が揺すぶられた人たちには、災いの

何一つもが及ばざるはなしなのだから、それは係累の多数の者に突如として襲って来て

その様はさながらまた、うねりが大海のトラークアから来る逆風の嵐でもって

深みの暗闇の上を追い立てられて走る時、

海底から黒い泥を巻き上げ、

（五九〇）

そして風に悩まされ波に叩かれた数々の岬が呻き声で吠え渡るよう。

ソポクレース『アンティゴネー』 翻訳（水崎）

八九九

ラブダコス家に纏<sup>ま</sup>わる禍<sup>い</sup>の古<sup>いにしえ</sup>よりしてのことであるのを、私は見る。

〔第一アンティストロペー〕

九〇〇

死んだ者らの諸々の禍<sup>い</sup>の上に降りかかつては、

一代は一族を放すことをしない。否、禍<sup>い</sup>を投げ落とすのだ、

神々のどなたかが。してまた一族は解放を得ぬ。何故ならば、この今も、

最後の根の上に射し込んだ光、オイディプースの館の中の、最後の光を、

(六〇〇)

あらためてそれを、地下におわす神々の、血に染まった

灰が刈り取りなされているのだ、それは言葉の無分別にかつまた心の逆上ぞ。

ゼウスよ、あなた様のお力を人々の如何なる踏み越えが制することがありましょう。

〔第一ストロペー〕

そのお力を、眠りもいっかな捕えはしないのだ、すべてを狩って捕える眠りさえ。

また神々の疲れることなき年月もだが、時でもって老いることなき

支配者として、あなたはオリュムポスの輝く光を保ち給う。

(六一〇)

この後もまた将来も

また以前にも満ち足りてこそあるだろう、掟のこれは。何ものも来たらず、

死すべき者どもの人生には、とにかく大に過ぎたるものが禍<sup>い</sup>のその外では。

何故ならば、行く道逸らすその希望、人々の多くの者には利であるが、

〔第二アンティストロペー〕

多くの者には空<sup>う</sup>け心の憧れのその欺き。

だが、何も知らない者にこそ忍び込む、熱い火でもって足を人が

焼くその前に。何故とて、それは智慧をもって或る人から、名高い言葉が現されているからだ、

（六一〇）

「悪しきものの何時しか善きものところ思われて

あるのだ、この者に。すなわち、その者の心をば

神が迷妄へと導きなさるその者には。

だが、彼が事を、極々僅かな時に渡ってだけ、迷妄の外で行うのだ。

（ここで再び登場したクレオーンに向かって）

これはハイモーン様だ、あなたが御子息の中でも末にお生まれの。はたして許婚の御娘アンティゴネー様の運命に胸を痛めてお出ででありましょうか。御結婚の欺きに痛みをお覚えなされつつ。

（六三〇）

〔第三エペイソディオーン〕（631-780）

（ハイモーン登場）

ソポクレス『アンティゴネー』 翻訳（水崎）

九〇一

クレオン　すぐにも我らは知るであらう。占い師どもより以上にな。

(ハイモーンに)　我が子よ、許婚の最後の判決を聞いて、よもやお前は父に対し怒鳴り散らそうと遣って来とるんじゃないあるまいな。それともそちには我らは、どこをどうしようと、好ましくあるかな。

ハイモーン　父上、私はあなた様のものでございます。そしてあなたは私のために、御意見の立派なのをお持ちになりながら、正しくお導きでいらっしやいます。それらにはこの私とにかく添うて参ることでしよう。何故なら、この私にはどんな結婚もより大きなものとしてもたらされるとは見ないことでしよう、立派にお導き下さるあなたよりも。

クレオン　その通りじゃ、お前、その通りに肝に銘じておくんじゃない、万事、父親の意見の後で立て(六四〇)るのだと。何故とて、そのためにこそ世間の者は祈るのだから、聞き分けのよい子供らをもうけて家内に持つことをじゃ。それは彼らが敵にはまた諸々の禍いでもって報い友はまたこれを父親と等しく尊ぶと思つてのこと。じゃが役にも立たぬ子供を儲けた者、これをお前は何と言おうかな、自分自身にとっての苦勞の種、敵どもにとっては大層なお笑い草をば産んだと言うより他に。今は、お前、とにかくその知力を女の快樂によつてそのために投げ出してはならぬ。承知の上でじゃ、冷たい抱きものにこそそいつはなるのだということを、女の悪しき妻の家(六五〇)にあるのはじゃ。何故ならば何がより大きな傷ともなるうかな、悪しき友より以上には。いいや、ちょうど敵にでもというように、唾吐きかけてこの女、行かせてしまふのじゃ、あの世でこいつが誰とでも妻合めあうようにな。彼奴きやつを捉

えたからには、はっきりと公衆の眼のあるところでこの余は全ポリスからだこの女一人が隔たっておるところじゃが、そうであるからにはとにかく余自身を嘘つきにポリスに対してするわけには参らぬ、いや殺すのじゃ。それらに向かつては彼奴が血縁を守るゼウスの名を呼ぶなら呼べ。身内の者らを生まれついでたふしだらと余が養おうものならば、一族以外の者たちをも、そうせざるまいて。

(六六〇)

何となれば、家々にて誰でもあれ有用の者である者は、また必ずやポリスにおいても正しくあるだろう。限度を超えて或いは諸々の法に暴力を振るう者、或いは支配をしている者たちに命令せんなどと思う者は、あり得はしない、この者がこの余からの称賛を勝ち得ることなどは。否、ポリスが立てた者、この者からこそ人は聞くのではなくてはならぬ、些少なこともども正しいこともどもその反対のこともどもじゃ。そしてこの男こそは余は確信するのじゃ、先ずは見事に支配をするし、他方、支配されることをよく欲するし、また槍の嵐のその中に配されてありな(六七〇)がら忠実で怯むことなき戦友としてまた留まるのだ、と。支配の欠けてあることよりも大なる悪はないのだ。それこそが諸々のポリスを滅ぼし、家々を荒廃させるのだ。このものこそともに戦う槍を向き変え潰走させるのだ。だが、まっすぐに身を立て直している者たちの支配への従順は、多くの身を救うのじゃ。このように我らは秩序とされることどもに助けとなり、決して女に劣ることはあつてはならぬのじゃ。より勝るのは、どうしてもなら、男の手から追い払われること。それで我らは女に劣る者とは呼ばれることもありはすまいて。

(六八〇)

コロスの長 私どもにとつては、先ず、もし齢によつて欺かれてしまつてはおらなんだなら、如何にも道理でお語

りと思われます、そのお語りのことどもにつきましては。

ハイモーン お父上、神々は産み出しておられます、人間どものために知力なるものを。それはあらゆる持ち物の中に最上のもの。この私は、ですが、あなたがどのようにそうしたことをまっすぐにお語りではないのかを、申し上げることも出来ませんし、また申し上げようも存じません。とは申せ、生ずることもございましょう、他の者にとっても何かよきことが。

さればあなたを守って私がすべてに備えるつもりです、人が語り或いは人が行い或いは非難しようと持っている限りのそのすべてにでございます。何故ならば、あなたの眼が恐ろしいのですからね、大衆には。あなたが（六九〇）聞いて喜ぶことのないそうした言葉どものため。ですがこの私にとっては聞くことが出来るのです。暗がりの下でそれらのことを。その娘をどのようにボリスが嘆いているか、すべての女たちの中にあり何と最悪のことになど当たりもせぬ身でありつつも、最上の評判の仕事からして身を滅ぼしている。彼女は自分の血を分け合った兄弟が流血の中に倒れてしまったのが、弔いもされず生肉喰らう犬どもによって果てることを放っておかなかったのだ、それに鳥どもの中の何かによっても。彼女こそは黄金の名誉を勝ち得るが至当ではあるまいか。このような何かば（七〇〇）んやりとして密かなものとして噂が広がっているのです。

ですが、この私にはあなたが仕合わせもよくいらっしゃるのよりは、父上、どんな持ち物もより尊ぶべくもありません。何故とて、何が父親の栄える善き評判よりも、子供にとってはより大きな名誉でございましょうか。或いは何



が子供からしては父親には。されば今、どうかただ一つの思い方だけを御自分の中で固執することなどなされませぬよう。あなたの御主張通りこれがまっすぐで、何一つ他のものは然らずなどとでございます。何故ならば、自分自身のただ一人が思慮を働かせているのだと思うとか、或いは他人の持たぬ弁舌や魂を持っているのだかと思うとかする者、こうした連中は内が開かれると空っぽなのが見られたものでございます。

人は、よし何か賢者ではあれ、多くのことを学ぶことは何一つも恥ずかしいことではないし、また（七一〇）余りに自説を押し通さぬようにすることもそうでございます。御承知でしょう、冬の急流となった川の傍らで、木々の中でも靡く限りのものどもは枝々を救うものでございますことは。ですが、逆らう木々は根こそぎにやつつけられてしまいます。同じその通りに強く帆綱を張って何一つ弛めることのない船は、ひっくり返って後は漕座も逆に航行するのです。

いやしかし、お怒りからは退かれ、お心変わりをお与え下さい。と申しますのも、何がしかの意見がこのより年の若い私からも付け加わると致しますなら、申し上げますこの私は。最上は大いに生まれついてあること、（七二〇）人が万事につけて知識に充ちたあり方をしてでございます。ですが、さればもしそうは行かぬとしますなら、とは事はその通りには行かぬならいでございますもので言うのですが、よく語っている人々から学ぶのが立派なことでございます。

クロス 殿様、あなた様も尤もでございます、もし何か時宜に合ったことをこの方がお語りであれば学ばれる

のが。またあなた様もあらためてこの方からして。何故なら、よくぞ語られておりますからには、両方の側で。

クレオン こうした齡の我々が教えられるべきであろうとかな、齡そうした者によって思慮深くあることを。

ハイモーン 何一つ正しからざることなどは。ですが、この私が若くてありまして、生きた時間の長さをではなく、むしろ一層私の真価こそよく見るべきでございましょう。

クレオン 真価とやらは秩序を乱す者どもを敬うことなのか。

(七三〇)

ハイモーン 何でお勧めなどまで致しましょうか、悪人どもへ敬いの心を捧げることを。

クレオン あの女<sup>おな</sup>、そうした病いに取り憑かれてしまつたものではなかったかな。

ハイモーン 然にあらずと申しております、このテーバイの同じポリスの民たちは。

クレオン とは、ポリスが我々に、我々が指図すべきを言うのだということか。

ハイモーン お分かりですが、そのこと何と余りにも若い者がというように仰有られたことか、と。

クレオン だとは、この余以外の者によって余はこの地を治めねばならんのだとか。

ハイモーン それと申すは、ポリスとは一人の者ののだといったものではないからでございませう。

クレオン 支配している者のでポリスはあるのだとは、認められんのかな。

ハイモーン 御立派に、とまれ無人の土地をなら、あなたはただお一人でお治めになられることでしよう。

クレオン こ奴め、どうやら女とぐるで戦つとるらしい。

(七四〇)

ハイモーン もしも女であなたがお出でならば。何故なら、あなたをこそ本当に私は気にかけているのですから。  
クレオーン 途方もない不埒者め、論争を通して父親に対するとは。

ハイモーン それは、正しからざることどもをあなたが過ちなさってるのを、私が見るからです。

クレオーン 余は過っているのだと申すのか、この余が持つ大権を敬うておりながらに。

ハイモーン 敬ってはおられません、とにかくすべての神々に対する犠牲をでしたら。

クレオーン おお、忌まわしい性格め、女の後列しやがって。

ハイモーン あなたはそれでもお取りにはなりますまい、とにかく恥ずべきことどもに打ちまかされてこの私があ  
ろうなどは。

クレオーン とにかく言葉は貴様にとってはすべてあの女のためにそれなのだ。

ハイモーン そしてとにかくあなたのため、私のため、また地下の神々のためでございます。

クレオーン あの女を何時かなお生きているのをお前が嫁にするといったことなど、きつとあるまいぞ。(七五〇)

ハイモーン されば彼女は死にましよう。そして死んで行きながら誰かを滅ぼすことでしょう。

クレオーン そもそもまた脅迫しようとするまで、そうして大胆にも貴様は突き進むのだな。

ハイモーン ですが、何が脅迫でありますことか、空しいお考えに向かって語りますことが。

クレオーン 泣きながらに貴様は教えることだろうさ、自身が知力など空っぽでいてな。

ハイモーン もしあなたが父上ではなかったとしたら、私は言ったことでしたらう、あなたは痴れ者だと。

クレオーン 女の奴隷でありながら、私を丸め込もうなどしてはならぬ。

ハイモーン あなたはお望みだ、何かを語ることは。そしてお語りになりながらも何一つ聞く事はお望みではないのですか。

クレオーン 本当か。いやしかし、このオリュムポスにかけて、よく知るがよい、いい気になって非難の数々、この私に悪口三昧など貴様がすることはなからうぞ。

(侍臣の者らに) そちども、憎き奴を引き立てて参れ、面前ですぐにもこれがこの場に在るのにもそ(七六〇) 　　いつは花婿の近くで死ぬようにとじゃ。

ハイモーン いやこの私にその場にいてそんなことあるのですか、そのことを何時かあなたが思われることなどあってはなりません。それに彼女が近くにあつて死ぬこともないでしょう。またあなたも、この私の頭を打ち見ることもありますまい、両眼でもって見ながらに。それではお友達のその気の方々と一緒にいて狂つていらつしやれ。　　コロスの長 あの方は、殿様、行つておしまいですが、怒りからして足早に。ですが、あのお年頃のお心は、痛めば酷く激昂を致すもの。

クレオーン するがいい。思ひ上がらせておくさ、人並み以上に及びつた。じゃが、二人の娘のそいつらが死を免れなどきつと致すまいぞ。

コロスの長 とは、二人とも彼女たち、殺してしまおうとのまたお考えであられてからか。 (七七〇)

クレオン とにかく手に触れることのなかった方は殺すまい。そちはよくぞ申してくれたぞ。

コロス ですが、どのような死でもって彼女は殺そうとまたお望みか。

クレオン 死すべき人間たちの果てていない途へと引いて行き、閉じ込めるそのつもりじゃ、生きたままを岩の堀り開けたその中にな。食い代は、ただ罪亡ぼしといったそれだけをあてがってじゃ。汚れをポリス全体が逃れるようとな。そしてそこで黄泉路の神ハーデース、神々のうちただそれだけを彼奴が敬うその神に頼み込んで行くなら、何処かしら、死なずに済むことを得もすることだろう。或いはともかくも彼奴は知ることだろう、その時に余計な苦勞なのだ、黄泉路のことどもを敬うことは、とな。

(クレオン、王宮の中へ退場) (七八〇)

[第三スタシモン] (781-805)

コロス エロース、戦いに打ち負かされることなきもの、 (ストロペー)

エロースよ、汝れは財宝を荒らし。

汝れは乙女の柔らかき両頬に、

寝ずの見張りを見張るのだ。

して、海原を超えて彷徨い、

また野に住まう者たちの家にある。

また汝れを、不死なる神々の中、

如何なる御方も逃れることは能わず。

また陽炎<sup>かげろう</sup>の人間どもにあつても、とまれ汝れをば逃るるは無し、

エロース持てる者、皆これ荒れ狂う。

(七九〇)

〔アンティストロペー〕

(46)

ああ汝れは、正しい人たちの知力をさえ、力づく、

不正なものに引きずり逸らし、破滅に追い込む。

ああ汝れは、人々のこの憎しみをも、

血を分けたものとして、掻き立てては持っているのだ。

だが、勝利をするは、麗しき花嫁の両の眉輪の、

人の眼に紛うことなき著き<sup>しる</sup>懂<sup>ヒジメコト</sup>れ、

そは、諸々の広大なる天地の掟の傍で、

支配の座にあるものよ。

何故とて、抗し得ぬものにも嘲笑をなさるから、

女神アプロディーテーがその方。

(八〇〇)

(アンティゴネー、引き立てられて登場)

コロスの長　だがこの今に、今やこの私自身が諸々の掟の外に連れて行かれるわ、こうしたことども眼にしては。  
して止めることも最早叶わぬぞ、涙の流れを。すべてが眠らねばならぬ閨へとあのアンティゴネー様が道行きなさるのを見る時には。

〔第一コンモス〕(806-882)

アンティゴネー　御覧下さい、この私の、父祖の地の市民の方々、  
最後の途を

〔第一ストロペー〕

辿りますのを。太陽の最後の光りを

見詰めていますのを、

もう二度とは見ますまい光りをば。けれども私を  
なべてを眠らすハーデースが生きながら引いて行きます、

(八一〇)

アケロンの

岸辺へと、婚礼の諸歌に与りもせぬ者を。

それにまた結婚を言祝ぐ<sup>ことほ</sup>

何かの讃歌が私を

讃えることもしなかった、いいえ、アケロンに私は嫁ぐことでしょう。

コロス　されば名も高く称賛受けながら

あなた様は使者たちのその隠れ家へと立ち去って行かれるのです。

蝕<sup>むしば</sup>む病いに打たれてでもなく、

刃を執った報酬を得てでもなく

いいえ、自ら掟してただ一人、生きたその身で

使者たちのハーデースの国へと降りてお行きなのです。

アンティゴネー　私は聞きました、身を滅ぼしたことを、

途方もなく痛ましく異国プリュギアのタンタロスの娘が

〔第一短短長脚の合唱システム〕

（八二〇）

〔第一アンティストロペー〕



シビュロスの頂で。

彼女をば、きつく閉める常春藤きづたさながらに

岩が生えて延び、組み敷いたとか。

そして彼女をばやっ寢れて行くのにも、雨に雨がかり、

人々の伝えに拠れば、

また雪がかかって、決して後に置くことがないのだとか。

して、涙また涙の眉輪の下、胸をば濡らすのだとか。

その方とまるでそっくりそのままに、

私をダイヤモンドが眠りに就かせるのです。

(八三〇)

コロス いやしかし、彼女は神にして神の生まれ

〔第二短短長脚合唱システム〕

だが、我らは死すべき身にして死すべき生まれ。

とは申せ、女にとってその朽ち果てて行く時には、大きなことをその身に聞くことでございます、

神々にも等しい人々ととの運命さだめを享けたそのことは、生きてありつつまたその後に行きつつその中で。

おお、私、嘲りを受けてるわ。何故に私を、父祖伝来の神々の御前で、あなたは甚振<sup>いたぶ</sup>りなさるのです。行<sup>な</sup>ってしまつてなどはいず、いいえ、眼の前にいますのに。

(八四〇)

おお、ポリスよ、ポリスの

家柄ある方々よ、

おお、悲しや、ディルケーの諸々の泉よ、

またよき車持つデーバイの神の苑よ、せめてはとにかく、ともに証<sup>あかし</sup>する者に、あなた方を私は勝ち得るのです。

どのように親しい方々から嘆きもされず、どのような掟<sup>おきて</sup>でもって、

新たな墓の高く積まれた圜<sup>かき</sup>いに向かつて

私が行くかのであるかということの、

おお、悲しや、不幸な私、

地上の方々と地下の方々と家が一緒ではないのです、

生きてある方々と死んだ方々とも。

(八五〇)

クロス 向こう見ずの極端へと突き進み、

〔第三ストロペー〕

あなたは、裁きの女神ディケーのいや高い台座へと

倒れ込んだのです。娘御よ、したたかに。

だが、父祖伝来の何かの試練を償いなさっておられるのです。

アンティゴネー お触れになられたわ、この私にとって最も苦痛な心配ともに。

〔第二アンティストロペー〕

お父様の三度語られた嘆きに、

また私たちすべての

名も高きラブラダコス家の

人々にとっての嘆きに。

おお、悲しや、結婚の床からしての

母の禍いに、

また生んだ我が子との契り、

この私の父に対しての悪しく運命づけられた母ととして起こってしまった。

何という方々からこの私は、一体、惨めなものに生まれ出たことか。

ソポクレーズ『アンティゴネー』 翻訳（水崎）

その方々へと向かって、呪われて、稼ぐこともなく、  
これ、この私は家をともしに参るのですわ。

おお、悲しや、不運な御結婚にお当たりのお兄様は  
死なれてなおこの世にある私をお殺しなされたのです。

(八七〇)

クロス 敬虔の行いは先ずは何らかの敬虔だが、

権力は、だが権力に関わる者には、

蔑<sup>なま</sup>されてよいものでは決してない。

じゃがあなた様を、自分でお決めなされて行くその御気性が滅ぼしました。

〔第三アンティストロペー〕

嘆きもされず、友もなく、結婚の歌を歌ってもらうこともなく、

〔後歌〕

惨めな者に私は曳かれて行きます。この用意された道を。

最早私には太陽のこの聖なる眼を見ることは

掟られてはいないこと、惨めな私には。

(八八〇)

して、この私の不幸な運命は涙流して泣かれることはなく

親しい人の誰一人もこれを呻くことはありません。

(クレオン、衛士を連れて登場)

クレオン　そちどもは知っておろう、歌などや泣き言は、死ぬる前には一人さえも止めることなどしないものだとは、もしそれらを口にするのが得ならばじゃ。

そちども、連れて行かんのか、出来るだけ早く、そして屋根のある墓に閉じ込めた上、余の言っておったこと、放っておくじゃ、ただ一人きり人のいぬままに。よしまた彼女が死のうが

よしまたそうした家の中で墓に入れられ住んで行こうが。

何故とて、わし等は清浄穢れなくこの娘の身の上についてはあるからじゃ。

だが、さればじゃ、地上のものの住まいからは彼女は奪い去られてしまわねばならん。

(八九〇)

アンティゴネー　ああ、お墓よ、花嫁の部屋、掘られた永久とこしえに続く家よ、そこへと私は参ります。私自身の身内の方々へと向かつて。その方々が亡くなられた時、最大の数、死者の中に黄泉路の女王様ベルセパッサはお受け取りでおいでになったけど、その方々の中の最後の者にこの私、そしてずっと惨めな者として、下って行くのですわ。私にとって寿命の分け前が尽き果てますその前に。けれど、参りながらにも私、希望の中に養っておりますの、愛される者だと先ずお父様に向かつて参りましょうことを。そして可愛い者だとお母様には。また愛される者だとあなたには、

お兄様。

お亡くなりの方を手づからこの私がお身体をお清めし、着付けをして差し上げ、お墓での供養の（九〇〇）  
灌ぎもお与えたのでしたから。ですがこの今、ポリュネイケースのお兄様、お身体を覆って差し上げてはこうした  
ことを私は得た始末なのです。

それでもあなたをこの私、大切に致しました、よくよくも。物の分った人たちの眼にとってはですけど、何故っ  
て、もし私が子供たちの母親だったとしても、またもし夫が私にとって死んで朽ちて行っただとしても、ポリスの方々  
の意に反してまでこの苦勞を私が選ぶことはなかったことでしょうか。どんな決まりのためにそれを私は語るの  
しょうか先ず夫は私によし死んだとて他の夫がおりましたろうし、子供もまた他の人から得ますでしょう、（九一〇）  
よしんばその子を失いまして。ですが、母と父とがハーデースの国にお隠れになられてしまっただけは、何時か生まれ  
来よう兄弟などはありは致しません。そうした決まりでもってして、この私、あなたを取り分けて大切にしたのでし  
たが、クレオーン様にとってはそれらは過ち、恐るべきことを敢えてすることに思われましたのよ、お兄様。そして  
今、彼は私を両手の間にとそんな風にとっ捕まえては引き立てているのです、未婚のまま、婚礼の歌もなく、結婚の  
も子供の養育の順番を得ることない者として。いいえ、このように私は親しい人たちには見捨てられて惨（九二〇）  
めな定めめの者として、生きていながら死んだ方々の穴蔵へと行くのです。

ダイモーン方のどんな正義を踏みにじってなのでしょう。どうして私、この惨めな者が神々へとなお眼差ししなく

てはならないのかしら。誰に、ともに戦う誰に、私は話かけねばならぬのでしょうか。とにかくにも不敬の罪を、敬虔の行いからして私は得たのですから。いいえしかし、もしも先ずこれらのことが神々におかれては立派なことであるのならば、辛い目に遭って私ども、恐らくはその身に覚えることでしょう。間違いをしてしまっているのだと。ですがもし、この方々こそ誤っておられるのだとしたなら、この方々がより一層の悪をその身に蒙りなさいませんように、この方々が不法な仕方で私になさっておられる以上には。

〔アンティゴネー、衛士らに引き立てられて退場、クレオーンも王宮の中へ〕

コロスの長　まだ魂の同じ風のそれらの激風がとにかく彼女を掴んでおります。

(九三〇)

クレオーン　じゃと言うなら、それらのことの災難が引き立てて行く者どもには必ずあろうわ、遅さの故にな。

アンティゴネー　ああ、死にもうすぐと間近に、その言葉、来てるのだわ。

クレオーン　元気づけに何一つ余は励ましてなどはやらんのだ、それらはそう決まっておらぬなどとな。

アンティゴネー　おお、テーバイの里の父祖伝来の町よ、そして先祖の神々、私はすでに引かれて行き、最早、待たなしのところですよ。御覧下さい、テーバイの王家の方々、王家のただ一人と残った女の私を。どのよう(九四〇)なことをどのような者どもからして私は身に蒙っておりますかを。敬虔のまことを敬いましたその上で。

(アンティゴネー、衛士らに引き立てられて退場)

## 〔第四スタシモン〕 (94-987)

コロス ダナエーの見目麗しい身体もまた、天の光を去り

青銅造りの座敷に移り変わることを耐えました。

して、墓にも等しい女部屋に隠されて

幽閉されたのです。

とは言え、生まれは尊くて、お嬢様よ、お嬢様よ、

ゼウス、黄金の雨を流す方の、お子を宿したのでした。

(九五〇)

いやしかし、運命づけられた力とは恐ろしいもの

そのものを、富も、アレースの武力も、

城壁も、海に打たれる

黒き船々も、逃れることは出来なかったのです。

縛られたのです。痼癩持ち、ドリユアースの息子

エードノイ人の王は。数々の皮肉の故に、

ディオニューソスから

## 〔第一ストロペー〕

## 〔第一アンティストロペー〕



岩の牢屋に閉じ込められて。

そのように狂気から、恐ろしくて

また盛んだった力が治まってゆくのです。彼の人は、知るを得たのです。諸々の狂気でもって、

(九六〇)

神に手を触れたるを、嘲りの言葉の数々で。

何故とて、彼は神に憑かれた

女たちとエウオイの掛け声の火を取り抑え、

また笛を好むムーサの女神たちを怒らせたのだから。

暗い色の二つの岩の大洋、二つの海のその傍に、

〔第一ストロベ〕

ボスボロスの岬々やトラークア人の

サルミューデーツソスがあるが、そこは近くに住まうアレースが、

(九七〇)

ピーネウスの二人の子供にとっての

呪いを叫ぶ傷を見た、

残酷の妃から盲目にされ、

見ることもないそれを、両の眼の復讐叫ぶ球体のために。

両眼は打ち砕かれたのだ、血みどろの

両手とまた飛び桴ひの尖った先の下で

不幸にも数々の不幸な苦難の下にくずおれながら

彼らは嘆き悲しんでいた、不幸に結婚した母の子孫だというあり方で。

(九八〇)

だが、母は、その胤たね、由緒或る血筋の中の

エレクトウス一門に達したのだった。

して、遠く離れた洞窟で

父祖伝来の疾風の中で育てられたのだ。

ボレアースの子、駿馬うまの如ごと、そそり立つ丘の上を駆ける

神々の娘であった。しかしながら、彼女の身の上にさえも、

運命の女神たち、永劫におわしますモイライは捕えました。

〔予言者テイレシアス、童子に手を引かれ、右手より登場〕

テイレシアース テーバイの公達方よ、儂わづらは遣はなつて参まゐつたところ、共同の道を、二人して一人からする眼差しを

して。盲目には通い路は手引きからして生まれて来るものじゃてに。

クレオーン　だが何事じゃ、御老人テイレシアースよ、異変とは。

テイレシアース　儂が教えましょうぞ。あなたは予言者に従いなされい。

クレオーン　余は、とにかくこれまで、そなたの意図に添わなかったことはなかったぞ。

テイレシアース　じゃによって、まっすぐな航路を通ってポリスを支配なされてるのじゃ。

クレオーン　余は出来るぞ、証言することが。この身に数々の利益を受けているとな。

テイレシアース　とくと思案なされませ、あらためてこの今に、剃刀の刃の上に立たれてな。

クレオーン　何じゃと。何とこの余は身震いすることか、そなたの口に。

テイレシアース　認識なされましょうぞ、この儂の技からしての諸々のしるしをお聞きなされながらもじゃ。儂が昔ながらの鳥占いの座に座っておりました時、そこは儂になべての鳥の集うところじゃが、儂は聞き（一〇〇〇）ますのじゃ、知らぬ鳥どもの騒ぐ声音を。不吉で訳の分らぬ激怒をもってそれらは叫び声を立てておった。そして血に濡れて鍵の爪で互いを彼らが引き裂き合うのを、儂は認めたのじゃ。翼どもの羽鳴りはしるしなくてなぞなかったのだからな。

直ぐさま私は恐れから焼き物供える儀式を試してみたのじゃ、十分に火のある祭壇でじゃな。じゃが犠牲からしては、ヘーパイストスの火は燃え立たず、否、燃えさしの上に腿から出た汁が滴り落ちながら溶けて、煙を立て、噴き

あがり、空中高く胆汁は飛び散り、そして腿骨は脂身を流しながら、覆っている脂身のその外に出てし（一〇一〇）  
まったのじゃ。

そうしたものとて、この子からして儂は学んだのじゃ、しるしなき秘儀の占うところは空しうなつたるをな、何故とて、この儂にはこの子が案内じゃが、他の者らにはこの儂こそがそうじゃてな。してそうじゃ、そなたの謀はかりごとの故にボリスが病んでいるのじゃ。何故とて、我らにとつては祭壇が、また犠牲の火所が、一切、鳥どもに犬どもの餌食、不運に倒れたオイディプスの子からのそれに穢れているからじゃよ。そしてそれで、犠牲を伴う祈願をもお受けに入れにはならないのじゃ。神々は我らからしては。そして腿の骨の炎もな。更にまた吉兆の叫び声を叫（一〇二〇）ぶことはすまい、死人の血に染む脂身を食らっておてはな。

さればじゃ、そうしたことどもを、そなたは、よくよく思案をなされるがよい。何故とて、人間たち、そのすべてには共通なのじゃ、過つことは。じゃが過つてさえ彼こそは最早分別なく不祥の者にもあらぬからじゃ、誰でもあれ、悪へと落ち込んで償いし、頑なにもならぬ者はな。張り通す我意はそなたに無様を招こうぞ。否、譲るのじゃ、死んだ者には。また滅んだ者は突刺すなかれ、何の力ぞ、死せる者をまたあらためて殺すことは。よくぞ（一〇三〇）そなたのために思案を私は致して、よく語り申しておるのじゃ。だが、学ぶことがよく語る者からなら、それは世にも心地よきこと、もしも彼が利益となることを語ってくれておるならばな。

クレオン 老人よ、皆してさながらに射手しゃしゅの如くとしてこの余を射ておって、また予言の術からさえ、そなた

らにこの余は遣られずにはいないのじゃ。種族のその手合いによって、余は売り買いされ、荷造りまでされてじゃ、昔からな。そなたらは儲けるがよからう。してサルデイスからは白金を交換しろ、もしそなたらが望むなら、またインドの黄金もな。だが、墓でもって彼奴をそなたらが覆うことはあるまいぞ。よしんばゼウスの鷲たち（一〇四〇）が餌として彼奴を奪ってゼウスの王座へ運ぼうと欲してもな。また更に、穢れとしてそれを恐れなどした上で、この余が彼奴を葬ることを許しもするまいぞ。十分に承知するからじゃ、神々を穢すべくも誰一人その力はあるまいとな。じゃが、倒れるのじゃ、御老人テイレシアースよ、死すべき人の身にある者で多くのことに練達の士さえ、醜い倒れぶりでなあ、醜い議論を美しく飾り立てて語るその時はじゃ、利益のためとてな。

テイレシアース おお、これは何とも！ はたして人々のうちに誰かは知らぬのか、思っても見ぬものか・・・

クレオーン 一体、何のことじゃ。どんなことを万人の道理としてそなたは語るのじゃ。

テイレシアース どれ程に持ち物の中で最も力強いものなのか、よき分別とは。

クレオーン それ程じゃよ、思うに、思慮なきことが最大の害だというその程じゃ。

テイレシアース その病いに、とは申せ、そなたは感染なされてお出でなのじゃ。

クレオーン 余は望まぬ、予言者に対して悪し様に言い返そうとはな。

テイレシアース それでも申されておられるのじゃ、虚偽を儂が予言したと申されてな。

クレオーン 何故とて、予言者の輩は皆して強欲じゃによってな。

テイレシアース　じゃが、王の出の種族は醜い利得を好んでござるな。

クレオーン　はたしてそなたは知っておろうかな、そなたが語っていることは支配者たる者を語ってなのだと。

テイレシアース　無論、承知じゃ。何故とて、この儂からこそそなたはこのポリスを救うを得られておいでじゃかな。

クレオーン　賢くてそなたは予言者ではあれ、そなたは不正をなすを好むぞ。

テイレシアース　そなたは掻き立ておるわ、この儂を、心中動かすべからざるものさえ口に出すよう（一〇六〇）  
とな。

クレオーン　出すがよい、じゃがただ利得の上で語ってではなくてな。

テイレシアース　今やそんな風に儂は語るのだとさえ思われているのじゃな、そなたの側では。

クレオーン　売り買いなどすることはあるまいようにと知るんじゃな、余が胸内を。

テイレシアース　いいや、とにかくそなた、よくぞ知られるがよからう、太陽のなお多からぬ周回をそなたが生きないその時に、その中でそなたが血肉からする子の一人を屍に死者たちの償いとしてそなたは代わりに差し出していることであろう。そなたは一方で地上の者たちの中から人を地下に投げ落とし、また魂をば無礼にも墓（一〇七〇）の中に住ませ、他方では地下の神々のものである屍をあらためてこの地上に、弔いに与らぬ、名誉を与えられることのない、敬いを欠いたものとして止めているからじゃ。死者たちのことはそなたにも天上の神々にも関わりなきも

のを、彼らは、そなたからそれらの暴力を受けておるのじゃ。それらのことからそなたをば、後からの破壊者らとて、待ち構えていますのじゃよ、黄泉路の神ハーデースと神々の僕たる復讐の女神たちエリーニュエスが、それらの同じ禍いの中に、そなたが捉えられるべくもな。

そしてこれらのことは、考えてみなされ、儂が金を貰うて語っておるものかどうかとな。とはすなわち、出現さすからじゃ、長からぬ時の過ごしが男たち女たちの悲鳴を館にとってじゃよ。して、敵とて、すべてのボ（一〇八〇）リスが立ち騒ぐのじゃ、ずたずたに引き裂かれた屍を犬どもや野獣ども或いは翼持つ大鳥が吊った限りのボリスがじゃよ。して大鳥は運んで行ったのじゃ、不敬の匂いを祭壇を持つボリスへとな。こうしたことども、そなたを目掛け、そなたが苦しめる故、そこで射手もさながら儂は射かけた。胸の滾りに、心臓への確かな射かけとしてじゃ。それら射かけの疼きをそなた、逃れはきつとすまいぞ。

子供よ、お前は儂らを家へと引いて行きなさい、胸の滾りをこの御方がより年若な者らに晴らしその舌をもっと穏やかなものに育てることを知り、また胸の知性を今より上等に持っていないさるためにな。（一〇九〇）

（ティレシアース、子供に手を引かれて退場）

コロスの長 あゝの御方は、殿様、行っておしまいだ、恐ろしいことどもを予言なされて。ですが、私どもは存じております、この私めが白髪を黒髪からして持ちましてよりこの方、いっかなあの御方が出鱈目をボリスへと引き当てなさりはしなかったことを。

クレオン 認めたところじゃ、自分でもな、して心を騒がしておるところでもある。何故とて、譲ることはまた苦々しい、じゃが刃向かって迷妄でもって滾る胸を打つ、恐怖に居合わすことじゃ。

コロスの長 よき分別を掴みとらねばなりません、メノイケウスのお子様。

クレオン 一体、何をなすべきかな、言うてくれ。従うぞ、この余は。

コロスの長 参られて、先ず娘御を掘られた岩屋から解き放ちなされ、して築きなされ、投げ出され（一一〇〇）  
た者には墓を

クレオン そしてそれらをそなたは勧め、また譲るがよしと思われるのだな。

コロスの長 とにかく、殿様、出来るだけ早急に。何故とて、切り詰めますからな、神々の足の速い悪さこそが悪しき思慮持つ者どもを。

クレオン おお、無念じゃ。先ずはやっとじゃが、じゃが心の目論みからは余は逸れるとするぞ、実行はな。だが、必然とは難しい戦いを戦うべくもないのじゃ。

コロスの長 さあ今、なさいませ、それらのことは自ら参られて、また他の者どもにお任せになったりされずに。  
クレオン 余のあるがまま、余はこうして参るとしようか。参るぞ、参るぞ、家来ども、ここにおる者も、ここにはおらん者どもも。斧を手に両手に取ってそなたら急ぐのじゃ、見える場所へとだ。してこの余は、（一一一〇）  
一旦思惑がこのように翻ったからには、自身が縛めたがまた親しく解き放つつもりじゃ。何故とて、余は畏くも思う



からじゃ、天の定めた諸々の掟を全うするが最善だと、人が人生を生きて行く時にはじゃ。

(クレオン、家来たち一同とともに左手へ退場)

〔第五スタシモン〕(115-1154)

コロス あまた 数多の名を持つ御方、カドモスが家の乙女の誇りよ、

また、ゼウス、高鳴る雷鳴なるもの、の血筋、

汝れははた、名も高きイータリアーを

みそなはし、またしろしめす、

エレウシスのデーオーの

諸人を迎える胸懷の中で。バッコスよ、

信女の母なるポリスに

汝れは鎮座まします者、水やか

のイスメーノスの流れのほとりに、

荒々しきドラコーンの齒の蒔かれた地の上に。

〔第一スタシモン〕

(1110)

君をこそ二つの岩の背を超えて、煌めき煙る火は  
見しか、そこはコーリュキオンの

乙女、汝れが信者らが進み行き、

またカスターアアの泉があるところ

また君をニューサの峰々の

木蔭の絡む諸々の高みと緑なす岸边

豊かな葡萄のそれが送る、

神さびしエウオーイの叫びの

叫ぶ中を、テーバイの大路を

みそなわさん君を。

そのテーバイを諸々のポリスの中から選ばれて、

すべてに勝り汝れは尊ぶ

雷に撃たれしその母ととも  
いかずち

そしてこの今、力づくの禍いに

ポリスは民、こぞってぞ取り憑かる。

来まさんことを、浄めの御足もて、パルナッソスの丘を越え

或いは呻きに充ちた海を越え

おい、火を噴く星々の音頭取り

夜の叫びの声の見守りよ

ゼウスが血筋の御子様よ、来たりませ

君よ、汝れがお供の方々、

靈感受けたテュイアスとともに。

彼女らは汝を前に、夜を込め狂気し踊ります、

宝の配り手イアッコスのその前に。

(報せの男・甲、左手の道より慌しく登場)

報せの男・甲　カドモスのまたアムピオンの御館の、その隣人の方々よ、ありませんあ、どのように決まったものとして人間の人生は、私は何時か褒めようにも何時か非難しようにも。何故とて、運が立て直し運が傾けるのです

からな、運よき者も運の悪い者もその都度に。そして予言者は誰一人こうと決まった人々のかとしては人間たちに与えられてはおりませんなあ。だってクレオーン様、このそれがしにとりそうありましたよう、かつては羨（一一六〇）ましい限り、敵どもからこのカドモスの地を救い、支配を一人で専らにしてはまた国土をすべて正して行かれておった、お子たちのよき血統の種子でもってお栄えになられてな。

そしてこの今、失ってしまわれた、すべて一切何もかも。楽しみってえのを男ども、投げ出す羽目になった日にゃあ、見やしませんな、このそれがしあ、そいつが生きてるとなんざあね。いいや、思いますなあ、生ける屍てなものにね。

だって家を何ならしこたまに富ますがいい、して生きるんだな、人は王様の成り格好で。じゃがだ、じゃが、もしそれらからして楽しむことが欠けたなら、他のものどもをそれがしあ煙の影の値段でだって買いは（一一七〇）しませんな、楽しみと比較しちゃあ。

コロスの長　だが如何なる悲しみの荷をあらためて、王家のこととてもたらしながら、そなたは遣って参られたか。報せの男・甲　お亡くなりでございます。だが、生きている者たちが死ぬのに責めがありました。

コロスの長　そして誰が殺すのか。して誰が倒れて横たわっているのか。語れかし。

報せの男・甲　ハイモーン様が亡くなられてましてございます。我と我が手で血にまみれられて。

コロスの長　御父上の手でか。それとも御自身の手でなのか。

報せの男・甲　我からが我からの手でもって、父親に対して死罪のことで激昂なされて。

コロスの長　予言者よ、その言葉、何とこれはまっすぐにも果たしたのか。

報せの男・甲　このように事はございますによってから、他のことどもはよろしくお諮りあります。

コロスの長　してこれは本當にすぐそこに私は目にいたします。哀れなエウリュディケー様、クレオー（二一八〇）様のお姫様を。したが、家内いえうちからはお子様のこと耳にされてのお出ましか、それとも偶然でのおでましか。

（クレオーンの妃エウリュディケー、侍女を従えて登場）

エウリュディケー　皆、町の方々よ、お話しの際は聞き齧りました、外出に向かっておりました時に、パッラーズの女神に対し諸々の祈禱を申し上げようと致しましたところ。そして私は内側から開けられる門かどの門を緩めておりまして、私を身内の禍いを言う話し声が打ちましてございます、この両の耳を通して。して私は、仰向けに恐ろしさの余りにのけぞって侍女の者らに倒れ、そして氣を失いました。いやしかし、どんなので話の筋があったものか、あらためて皆様お話しして下され。何故とて、諸々の禍いの数限りなきものは早ありますが、それでも私はお聞きします故に。

（二一九〇）

報せの男・甲　それがし、慕わしき奥様、その場にあった者として申し上げ致します。何一つ落としは致しますまい、真実からは話しをば。何故とて、何をあなた様に対してお有なめ申すこととなりましようか、あとになってそれが

しどもが嘘つきだと分かってしまうことなどをもってして。まっすぐなのは真実こそでございます、いつだって。

それがし、あなたの旦那様に侍り野の端へと着いて参りました。そこには横たわっておりまして、ポリュネイケース様の犬どもに食いちぎられた同情なきお身体がまだ。それでその御方を、私ども、道の神とブルートーに諸々の怒りを慈悲をもってお鎮め下さるようお願い致し、聖なる沐浴<sup>ゆあみ</sup>みを沐浴み差し上げて、新たに手折った若（一二〇〇）枝の中に置いて残されたのを一緒にお焼き続け申しました。そしてお生まれの土地に高い塚を築き上げて、その後で石でもって覆われた乙女の新妻の部屋、ハーデースの洞へと入って参りました。だが遠くから鋭く鳴咽<sup>おえつ</sup>する声を人は聞くのであります、神聖なものとはされなかった花嫁の部屋の辺りで。それで主のクレオン様の所に参ってお知らせ致します。してクレオン様に、哀れな叫びの定かならぬのが遣って参るのでございます、一層近くに蹢<sup>に</sup>寄り寄られるのでございます。それで高い呻きの声を上げられて、何とも早、悲痛の言葉を放たれるのでござい（一二一〇）ます。

「おお、惨めな余であることよ、はたして余は予言者でもあるのか。はたして最も不運の通い路を余は歩むというのか、通りかかった道の中でも。子供の声が私を訴えているわ。いやしかし、家来ども、行け近くに素早くだ。そして墓の傍に立ってよくよく見るのだ、石を引き抜き開けた隙間を入り口へと向かって降りて行って、ハイモーンの声をご余は聞き分けているのか、それとも神々のために余は誑<sup>たぶら</sup>かされておるのかを」とでございます。

それらのことを、氣落ちなされた御主人様のお言いつけからして、よく見ようと致しました。して墓（一二二〇）

の最後に、一方、娘御が首をお吊りになられてるのをそれがしどもは目撃致しました。薄い布の糸の首縄をしっかりとお着けになられてるのをでございます。他方、ハイモーン様は腰の辺りにその腕を投げ抱きしめておられ、黄泉路の花嫁の死をば、また父上の所業と不幸な結婚しとねの褥しとねのことを大声で嘆いておられました。

だが御主人はその彼を御覧になられ激しく嘆かれては中へとお入りになり、彼に向かって大声で泣かれてお呼びかけになられました。「おお、哀れなそなたよ、何たる所業をそなたは仕出かしているのか。どんな思いを持つにも至ったというのか。禍いの何においてそなたの心は損なわれたのか。出て参れ、息子よ。右手ついた嘆願者（一二三〇）とて余は頼んでおるのじゃ」と、こうでございます。ですが御主人を荒々しい両の眼でもって睨みつけては、御子は御主人様のその顔に唾をし何一つ言葉を返さずに、二重に刃の突き出た剣をお引き抜きになりました。ですが御父上  
が逃亡してさっと剣からその身をかわされまして、御子は遣り損ないされました。そこで不運な御方は自分自身に腹を立てて、ちょうど、御身がおありだったそのままに総身をお持たせてになって突き刺されました、脇腹に剣の半ばまでを。ですが力なき腕の中へとなおもお氣を確かにお持ちになられ、乙女子に抱きついてお行きになられます。そして喘ぎながら、速い流れを滴らせにおなりです、白い頬に流れ出る血の流れをばでございます。

して御子は横たわっておられます、屍むいとして屍の辺りに。結婚の御式は、お氣の毒な御方、ハーデー（一二四〇）  
スの館で遣るということで、お示しになられた人間たちにあつて思慮を欠くあり方がどれだけの人間にとって最大の禍いとしておかれているかということでございます。

(エウリュディケー、無言のまま静かに王宮の中へ入る)

コロス 何としてこれをそなたは見ようかな。お妃は行っておしまいだ、言うその前に、善いとも悪いともその言葉を。

報せの男・甲 私自身でもまた驚いております。ですが、それがし、希望に縋って思いますのは、御子の苦痛を聞きながらにもポリスへとはその悲嘆の数々は相応しからずと思し召し、されど屋根の下、家の中で、身内の痛みを嘆かおうとのおつもりであろうかと。何故とて、お妃は思慮分別に嗜み<sup>たしな</sup>なくて過ちをなさるといった方(一二五〇)ではありませんからな。

コロスの長 それはどうか。この私にはだが、されば、余りもの沈黙もかつまた分けもなく酷く騒ぐのも不吉なものとしてそこにあるよう思われますな。

報せの男・甲 いやしかし、私どもは知ることでございます、何かまた堪<sup>こた</sup>えたものを密かに滾るそのお胸でもってお妃様がお隠しなされてをられるのではないかと、館へ入って行けば、されば、良くぞ貴殿は申しておられますなあ。何故とて、余りもの沈黙には何処かしらその重いものがありますからな。

コロス そして本にそれ、殿様御自身がお出でなされた。もの申すが如き記憶のよすがを手になされて。もし口にするさえ掟に適うなら、余人の迷妄ではないものを。否、御自身が過ちなされたその上で。

(一二六〇)



(クレオーン、左手より登場、従者たち、ハイモーンの経帷子<sup>きょうかたびら</sup>をきせられた屍を棺に乘せて運んでいる。報せの男・甲、館の中へ入る)

[第二コンモス] (1261-1347)

クレオーン、おお、暗愚となりし心の過ち、

頑なで命を奪った。

[第一ストロペー]

おお、殺めたる者らにかつまた

死せる者、その一族をおんみら眼差ししているのである。

おお、余にとって余が謀<sup>はかりごと</sup>の幾多の惨めよ。

おお、我が子よ、若くして若き死とともに

ああ、ああ、

そなたは死せり、魂を解き放たれた。

この余の諸々の浅はかさでもって、汝がそれらには寄らずして。

クロス 悲しいかな、あなたはどうかやら遅くして道理を見られたようでございます。

(一二七〇)

クレオン おお、何と哀れな、

余はこの今ぞすっかり学んだところだ、惨めにも、余が頭において

神がその時は、して見ると、全くその時は大きな重さが私を取り抑えつつ

打ったのだった。して冷酷非情の道の中へと放ったのじゃ。

おお、何と哀れな、踏みにじられたものに覆してじゃ、歎びをな。

悲しいかな、悲しいかな、おお、死すべきものらの労苦の辛さよ。

(館より登場)

報せの男・乙 御主人様、現にお持ちになられかつまた獲得なされてということ。或るものどもは、一方、手づからにお運びになりながら、他方、或るものどもは館の中で、あなた様は参られてまたすぐにも眼にされまじうか、禍いをでございます。

(一二八〇)

クレオン だが、何なのじゃ、あらためて一層の禍いとは。これまでの禍いからしてなおもまだとは。

報せの男・乙 お妃様が亡くなられてございます。この御遺骸の、全くの母御の方が。お気の毒にも、今し方の新たに受けた痛手でもって。

クレオン おお、

〔第一アンティストロペー〕

おお、浄めることの難いハーデースの港よ、

何故に、して見ると、余をば滅ぼす、余をば滅ぼす。

余に悪しき報せの

苦痛を送りつけては、如何なる語りを叫ぼうとてか。

あいあい、死せる者をばそなたはまたも重ねて殺したのじゃ。

何とそちは申すのじゃ、若い子よ、何をそちは語るのじゃ、余に、新たなる、

あいあい、あいあい、

女の犠牲として、死せる者の上に、

死が重なったのだと。

コロス 御覧になられますように。奥の間には最早ございませんから。

クレオン おお、何としたこと

禍いのこのもう一つ第二のものを、余は、今しも眼にするぞ、哀れにも。

どんなのが、して見ると、どんな運命<sup>さだめ</sup>が、余を待ちうけようとか。

余は抱きおる、先ずは両のその手に我が子をば、

哀れな奴よ、してまた真向うに、余は今かくぞ眼にするのだ、屍を。

何と、何と、哀れな母よ、何と、子よ。

報せの男・乙 お妃は鋭利の剣でもって、祭壇際で、暗い両の臉をお緩めでございます。お嘆き遊ばしたは先ず先立つメガレウスの名誉の死、して、あらためて、このお方の定め、して最後にはあなた様に悪しき幸せの数々をお呪いなされてでございます。我が子殺しのあなた様に。

あいあい、あいあい

〔第二ストロペー〕

余は恐怖でもって身がすくむ。何故に余を、誰ぞ真っ向からの打撃を撃ちつけぬ、両刃の剣を持って。

哀れなるこの余ぞ、あいあい、

(一三二〇)

して哀れなる苦悩に、今やすっかりこの身も浸った。

報せの男・乙 この方々とあの方々の死の責めをなのだからと、お亡くなりのおお妃様からあなた様は咎められてでございます。

クレオーン　だがどのような仕方あで彼女は、その血を流した最後において、この世を立ち退いたのじゃ。

報せの男・乙　お撃ちになされてでございます、鳩尾みぞおちの下、手づから御自身を、御子様のその鋭き叫びで嘆かれる御悲運をお聞こしめになれますや。

クレオーン　おお、苦しみよ、余にとっての。これらをば他の如何なる人間へとも

合わせられはしないだろう、何時の日かに。この余の責めから外してじゃ。

何故とて、この余こそがそなたをば、この余こそが殺したのじゃ、悲惨なる者よ、

この余こそが、これぞ真実の声。おお。者どもよ、

連れて参れ余を、出来るだけ早く。連れて参れ、余を、遥かにも。

一層この世にあるわけではないこの余をば、失せて亡き者に比較して。

コロス　結構なことどもをあなた様はお勧めでございます。もし何か結構なことをこれらの禍いの中で申してよければ。何故とて、短くあってこそ最上、足元の禍いは、でありますれば。

クレオーン　来ませよ、来ませ、

現れよ、諸々の運命きだめにあつて最も見事なのを持ちたる運命よ、

〔第一アンティストロペー〕

この余にとって、最後の日を引き連れて。

最上の運命よ、来ませよ、来ませ。

最早これ以上、余が他の日を見入ることなきように。

コロス 来たらんもの、それらのことは。眼前のことどもの何かをこそ致すべきでございます。何故とて、心に留めることですからそれらのことどもは、心を留めねばならぬ者こそが。

クレオーン いやしかし、余が言おうとすることどもを先ず、それらをこそ余は祈願に込めたのじゃ。

コロス 今は何一つも、祈りを加えられますな。定められていた不幸からは、死すべき者どもには、避けようがあらは致しませぬと思し召して。

クレオーン 連れて参れ、軽率の男を何処へなりと。

そいつこそが、我が子よ、そちを心ならずも殺し、

(一三四〇)

またそなたをば、あらためて、そこなるそなたを、殺したのじゃ。おお、何と惨めな。してまた余は持ちようなしじゃ、どちらへ向かって見ようかともどの道筋で寄りかかろうとも。何故とて、何もかもが食い違ふからじゃ、手中にあつて。して他方、余が頭上には、耐え難い運命が打ちかかったわ。

(クレオン、従者に援けられて王宮の中へ退場、コロスの長、静かに独語する)

コロスの長 遙かにぞ、思慮あることは幸せの

その第一としてぞ基いたり。してとまれ神々へかけたことどもは

これに不敬の行いあるべからず。諸々の大言壮語は

その驕りへの大きな打撃を

償って

老齡をもって思慮することを教えたのだ。

(平成二十年八月八日 午前十時四十三分 翻訳完了)